

謹告

各位の渴望されて居りました故本多日生上人御撰述に依る本經祖書要文全部が掲載された勤行方軌としての法華經要品がいよ／＼清朝新活字を用ゐて見事に出来致しました。又日生上人が先年入念に弘通用として謹書し置かれし大曼荼羅御本尊は授與願出の方に感得者心得を相添へ、便宜お願も致します。此御本尊と要品があれば、子々孫々迄も信行上には百パーセント疑ありません。殊に要品は日蓮主義心髓たる本經祖書要文全部ありますから、自家用には勿論、布教用にも、海に遠隔と存じます。

故本多大僧正撰  
法華經要品 壹部  
本經祖書 改正定價 金五拾錢  
要文集 送料共

御本尊

大 特別用  
中 普通小型佛壇用  
小 懐中用  
投與御希望の方は願書提出の事書式用紙は御報次第差上ます。

勤行作法

壹部 金拾錢 送料共  
百部以上御注文の時は御報に依り貴名別込み致します。

目次

聖訓摘要	河生
日蓮教學講座(第一回)	日合
左翼闘士の轉向	上田
日蓮聖人讃唱の詩	中辰
蘭室往訪記	磯山
質疑應答	梶部
	木顯
	正事
	人明

○本部團報並に各地教信

○寄附團費誌料願收

第三十八年十月號

統一定價  
一册 金貳拾錢 送料五厘  
半々年 金壹圓貳拾錢 送料共  
一ヶ年 金貳圓貳拾錢 送料共

注意  
▲御申込ハ總テ前金ノ事  
▲前金相切候節ハ包紙ニ其旨表示可  
致候  
▲御特居ノ場合ハ必ず新舊共直ニ御  
通知ノ事

昭和八年八月廿四日印刷納本  
昭和八年九月一日發行

(第四百六十二號)

不許複製

東京市小石川區音羽町六ノ一七  
編輯兼 磯部 滿事  
發行人 鈴木 日雄  
印刷所 都 印刷所  
電話高輪六〇二四番

東京市小石川區音羽町六丁目一七

發行所 財團法人統一團

電話牛込五三三六番  
電話東京九四二〇番

統

財團法人統一團發行

# 聖

# 語

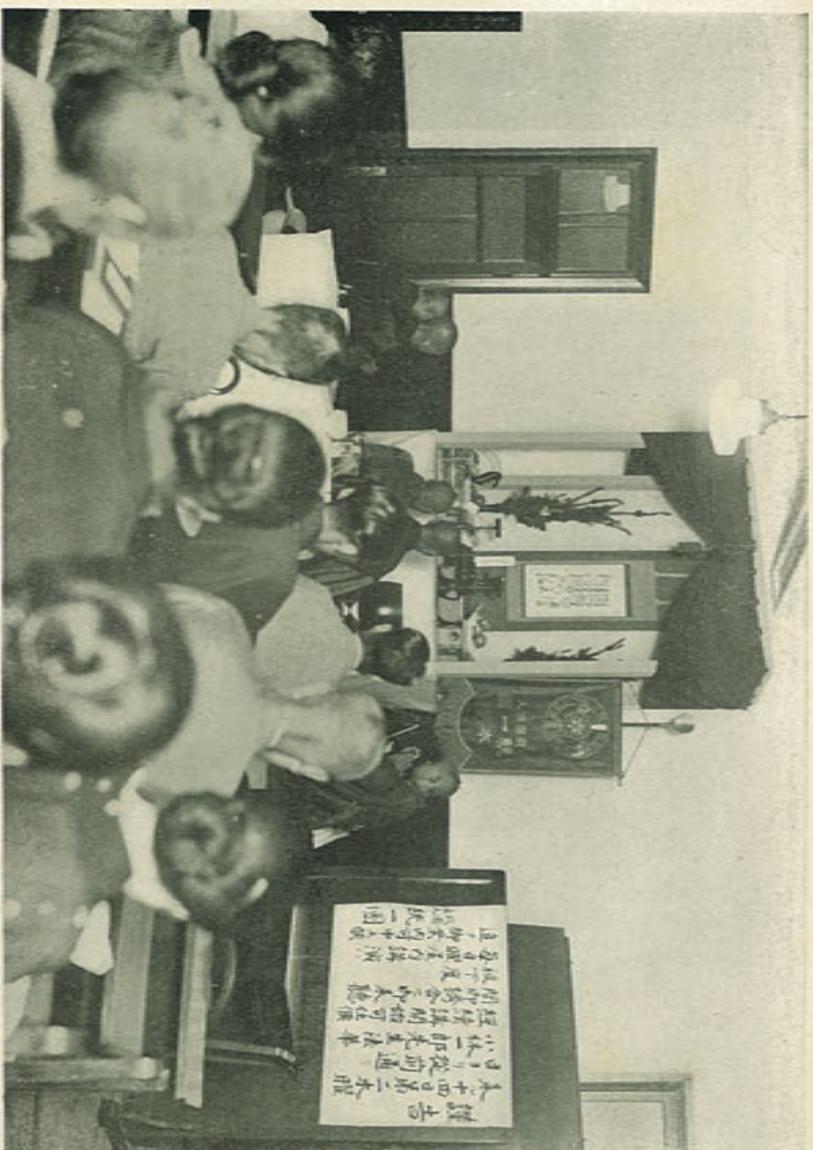
・されば日蓮も是の如く身延山より艮に當りて武藏國池上右衛門大夫宗長が家にして可死候か。日蓮は日本第一の法華經の行者也、此法華經は三途ノ河にては船となり死出の山にては大白牛車となり冥途にては燈となり靈山へ參る橋也。靈山へましまして艮の廊にて尋ねさせ給へ必ず待ち奉るべく候。但シ各の信心に依るべく候、心に二ツましくして信心だに弱く候は、峯の石の谷へころび空の雨の大地へ落つるご思召せ大阿鼻地獄疑ひあるべからず其時日蓮を恨みさせ給ふな、返すくもよく信心候てさはり無く靈山へましくして日蓮を尋ねさせ給へ其時委しく可申候

南無妙法蓮華經

弘安五年壬午十月七日

日蓮花押

(日蓮聖人最後の御遺文 波木井殿御書)



(大塚火災第十周年追悼法要要管長兼川口堂親下座筆)

聖訓摘要

日生上人

崇峻天皇御書

殿の人にあやまたれておはさは、設ひ佛には成り給ふとも彼等が悦びと云ふ、此よりの歎きと申し口惜しかるべし。彼等が如何にもせんと願みつるに、古よりも上に引き付られ参らせておはすれば、外の姿は静まりたる様にあれども、内の胸は燃ゆるばかりにや有らん。常には彼等に見へぬ様にて、古よりも家の子を敬ひ公達まいらせ給ひておはさんには、上の召ありとも且く慎むべし。(編纂遺文録一六四)

これはちよつと判りにくいやうですが、四條金吾を殺さうと思つて非常に狙つて居る者がある。四條金吾が日蓮聖人を助けて居るし、その爲めに日蓮聖人が一層元氣づいて猛烈にやるものであるから、先づ敵を射るには馬を射よといふやうな譯で、日蓮聖人を弱らせるには四條金吾を殺つてしまはなければならぬといふので、讒言をして四條金吾の領分を取り上げてしまひ、尙ほ暗殺してしまはうといふことを考へた。そこで日蓮聖人は四條金吾を非常に可愛がつて居られるから、之れを殺さしてはならぬとい

ふので大變心配して居られる、その事を茲に言はれるのである。今迄彼等がいろ／＼と附け狙うたけれども、殺されずして今日まで来たのである、此處で油断をしたならば殺られるかも知れない、殿の人にあやまたれておはさば——今度油断をした爲めにあなたが暗殺されるかも知らん、それは暗殺されてもあなたは佛には成られるだらうけれども、佛に成つたから宜いといふ譯ではないか、後に残つて居る日蓮や、又あなたの仲間はどうするそれは敵の方では悦んで「金吾頼基もえらさうに言つて居つたけれども、今度はとう／＼殺されてしまつたさうだ」と言つて凱歌を奏するであらう、けれどもこちらの仲間が爲めに非常に泣き悲まなければならぬ、その光景をあなたは何と思ふ、この所は實に面白く書かれて居る。あなたは殺されても佛に成るから宜いけれども、残つた者が堪らぬぢやないかそれだから油断をしてはいかぬ。殊に今日注意しなければならぬのは「彼等が如何にもせんと勵みつるに」——敵の者がどうぞしてあなたを殺したいと計畫をしたけれども、殺すことも出来ず、そこで已むを得ずいろ／＼な讒言をして領分を取り上げたらへこ垂れるかと思ふたら、あなたは思ひ切つて領分を投げ出してしまつた。所が主人江馬殿も却つてその志に感激して「古よりも上に引き附けられ參らせておはすれば」といふのは、江馬殿が却つて感心をして、一時は讒言を聴いて辛くも當つて見たけれども、彼は思ひ切つて領分を投げ出して、さうして涙を流して、「頼基は決して御主人を忘れは致しませぬ」と言つて居つた、どうも彼奴の言ふことは胸に對へたといふので、今度は今迄の領分の倍の領分を

與へて嘆び戻されることになつた、さうして館も良い館を捨てて與へられた、それを言はれるのである。「古よりも上に引き付けられ」といふのは、前よりも御主人に可愛がられて「金吾々々」と言つて用ひられるやうになつた。そこで「外の姿は静まりたるやうにあれども」——斯うなればモウ少し位讒言をする者があつても、江馬殿は決してそんなものを用ひられる氣遣ひはない、だから反對者もそれを知つて穩かな顔をして居る、表面は平和になつたけれども腹の中は残念で燃えて居るだらう。「内の胸は燃ゆるばかりにやあらん」で、隙があつたら彼奴を殺つつけなければならぬといふ事を内心では謀計んで居るだらう、それ故に今日は特に警戒をなさらんければいけないと言はれたのである。この中に書かれて居る通り、金吾が一時思ひ切つて領分を投げ出し、而かも主人を思ふ赤心を現はした爲めに、一層主人が金吾を大事にするやうになつた、即ち領分を倍にして返されたといふ事實があるのであります。尙ほその意味を續けて注意せられたことが次にある。

若干の人の殿を造り落さんとしつるにをとされずして早や勝ちぬる身が、穩便ならずして造り落されなば、世間に申す漕ぎ漕いでの船溢れ、又食の後に湯の無きが如し。(権道遺文録)

前にいふ通り反對者があなたを殺さう／＼としたけれども、先づ用心の良かつた爲めに殺す事も出来ずして今日まで来た。そこで讒言をした所が、その爲めに今度は却つて領分が倍になつてかへつて来たあなたは勝利者である、凱歌を奏した譯である。それが今になつて油断をして、萬一殺されるやうなこ

とがあらうものなれば、それは所謂世間でいふ「清き清いで船溢れ」である。清き清いで船溢れといふのはどういふ事かといふと、海上で難船をしかけた船が、どうしても陸岸に近づかなければならぬといふので、船頭が腕に力を入れて一生懸命に清いで清いで、さうして陸岸の方へ清き寄せて来る、さうして漸くモウ一丁ばかりの所に来たといふ時になつて油断をした爲めに、岩にぶつけて船が壊れて海の藻屑となつてしまつたならば、如何にも残念な事ではないか。折角ひどい波風の中を清き抜けて陸岸近くやつて来たのであるからモウ一息といふ所になれば更に油断をしてはいけない。陸が近くなつたなれば一層警戒をして無事に清きつけて終はなければならぬ。それと同じやうに、あなたが今油断をして殺られるやうなことがあつたならば、清き清いで船溢れではないか。「又食の後に湯の無きが如し」で、えらい立派な御馳走を食べさして貰つたけれども、終ひにお茶一杯出さぬやうなもので咽喉が詰つてしやうがない、御馳走をしてお茶を出さぬやうなものちやと言はれる、如何にも面白い譬へである。それではどうも仕上げの所がまづいぢやないか、だから油断をしてはならぬと言つて戒められた、中々用意周到なものである。

設ひ千萬の財を満ちたりとも、上に捨てられ参らせ給ひては何の詮かあるべき。已に上には親のやうに思はれ参らせ、水の器に従ふが如く、犢の母を思ひ、老者の杖を頼むが如く、主の殿を思召されたるは法華經の御助けにあらずや、あら羨ましやとこそ御内の人人は思はるらめ。(推測遺文録)

此處にも前には主人から勸當されたものが、今度はあべこべに主人が非常に可愛がつて呉れるやうになつた事を書かれて居る。あなたの心から言へば、假令千萬の財を積んだからと言つても、自分の思ふ主人から捨てられたといふことになつたならば残念至極な事であらう。所が今度はあなたは主人から非常に信用をせられて、親のやうに思はれ、水の器に従ふやうに、犢が母を思ふやうに、老たる者が杖を頼むやうに、あなたの主人はあなたを大事に考へてお居でになるではないか、それは要するに法華經の爲めである、法華經を信じ通し給ふたが故に起つたことだと言はれた。これに依れば四條金吾は終ひに主人から非常に大事にされたことが能く判かる譯である。

返す返す今に忘れぬ事は、頸切られんとせし時、殿は供して馬の口に付きて泣き悲しみ給ひしをば、如何なる世にか忘れなん。設ひ殿の罪ふかくして地獄に入り給はば、日蓮をいかに佛になれと釋迦佛誘へさせ給ふとも用ひ参らせ候べからず、同地獄なるべし。日蓮と殿と共に地獄に入るならば、釋迦佛、法華經も地獄にこそをはしますすらめ。暗に月の入るが如く、湯に水を入るゝが如く、氷に火を焚くが如く、日輪に暗を投ぐるが如くこそ候はんずれ。(繪圖遺文録)

これは四條金吾が日蓮聖人の龍の口で頸切られんとした時に、殉死しやうといふ決心をした、それは非常に立派な考へであつたから、それを日蓮聖人は今に返すくも忘れることが出来ないと言はれて居る。それ故にあなたが若しや誤つて地獄に墮ることがあつたならば、日蓮は假令お釋迦様がお嘆びにな

つても、その方には歸らないであなたと一緒に地獄に行きます、さうしたらお釋迦様も見舞にお出でになるに違ひない。お釋迦様が地獄に見舞にお出でになれば、暗の夜に月が出たやうに、氷に湯をかけたやうに、地獄の苦みは消え去つてしまふだらうといふ事を書かれた。この「同地獄なるべし」といふ事は實に日蓮聖人が四條金吾を愛し給ふた精神が能く見えて居るのであります。

人身は受けがたし爪上の土、人身は持ちがたし舂の上の露、百二十まで持て名を腐して死せんよりは生きて一日なりとも名を揚げん事こそ大切なれ。中務三郎左衛門尉は、主の御爲めにも、法華經の御爲めにも、世間の心根もよかりけりよかりけりと、鎌倉の人人の口にうたはれ給へ、穴賢穴賢。藏の財よりも身の財すぐれたり、身の財よりも心の財第一なり。此の文を御覽あらんよりは、心の財を積ませ給ふべし。(繪圖遺文錄)

これは非常に能く整ふた御教訓であつて、人間には容易に生れることが出来ない、さうして又その命は長く持つことが出来ない、人生には容易に出られんが、現はれたこの人間としての生命といふものは長くは續かぬ、假令百二十まで生きたからと言つても、その中にやり損ひをして詰らぬ事をして、所謂價値の無い一生を送つたならば、取返しがつかぬことである。それ故に生れ難き人生、移り易き人生に日々を送つて行く上には、餘程注意をして行かなければならぬ。その注意は、世間の道德から言ふても主人に對しての忠節を忘れぬやうに、又佛法の御爲めにも信仰を忘れぬやうに、一般世間の心懸けに於

ても缺けたる事の無いやうに、四條金吾はえらい者ぢや、えらい者ぢやと鎌倉の人に譽められるやうにしなければならぬ。それには心の財が大事である、即ち精神の修養を積まなければいかぬと仰せられたこの御教訓も非常に善いので、日蓮主義者は忘れてならぬ所である、唯だ信心第一といふだけではないか。信心第一、忠義第一、一般の心得第一、總ての點に於て法華經の行者は缺點のないやうに信仰を進めて行かなければならぬ。

### 彌三郎殿御返事

此の人人は我が荒氣をば知らずして、日蓮が荒氣のやうに思へり。(繪圖遺文錄)

荒氣といふのは「あら／＼しい」といふ意味の俗語であつて、世間の人々は、日蓮聖人が激しい事を言ふ、荒つばい事を言ふと、斯ういふ風に今も尙ほ考へて居るやうでありますが、それを日蓮聖人自ら辯明して居るのであります。この人人は自分が亂暴な考を有つて居る、それを日蓮が「さういふ事は宜しくあるまい」と言ふ場合に、日蓮の方が亂暴な荒い事を言ふやうに思ふのは間違ひであらうといふ事を言はれたのである。これは實に意味の深いことで、能く日蓮聖人の「折伏」といふことを、惡口をしたとか罵詈したとか、唯だ無闇にひどい事を言ふと世間で言ひますが、それは物を研究しないからいふことである。日蓮聖人の折伏の論據はいろいろありますけれども、主なるものは二つである、一つは

日本の道徳上、政治上の事に就いて、北條が跋扈して天皇を流し奉つたり、いろ／＼惡逆な行爲があつたからして、それは善くない、さういふ間違つた事をする鎌倉の勢力に阿附して、殊に宗教家が鎌倉の提燈持ちをするといふことは間違つて居る、そんな坊主があるべきものではないといふ事を言ふたのである、少しも荒つばい事ではない、日本の國民道徳としては順逆の理を明かにするといふことは當然のことナンである。今一つは佛教の上にて、釋迦牟尼佛を中心にならなければならぬやないか、それは釋迦牟尼佛が一切經をお開きなされた上から考へても、又法華經の壽量品に於て顯本せられた場合から考へても、佛教に於ての釋迦牟尼佛といふものは、佛教徒が一般に信仰しなければならぬ譯である、然るに釋迦牟尼佛を輕んずるやうな事を佛教の中から言ふたからして、それは間違ひぢやと言つたのであつて、當然の事である、親を親とせい、君を君とせい、佛を佛とせいといふのであつて、少しも日蓮に於ては荒つばい事をいふ譯でないと言はれたのでありますが、今もやはりさういふ譯のものであらうと思ふ。

釋迦佛は親なり、師なり、主なりと申す文、法華經には候歟と問うて、有りと申さば、さて阿彌陀佛は御房の親主師と申す經文は候かと責めて、無しと云はんずるか又有りと云はんずるか、若し然る經文有りと申さば御房の父は二人歟と責め給へ。(續前道文錄)

これも諸君の既に御承知の通り、釋迦牟尼佛が宗教の意味に於て吾々の永遠の生命から考へ、又この精神を教ふ所の教を立てられた事から考へて、法華經には釋尊が此の三界は皆我が所有である、その中の人人は我が子である、併しそこにはいろ／＼の苦みがあるからして、この釋迦牟尼が一人して之れを教ふのだといふ事をお説きになつて居る、主師親の三徳の文といふものは如何にも明瞭なことである。その大事な經文があるにも拘らず、若しこの釋尊を除いて他に佛教徒の親があり、主人があるといふならば誰であるか、それを尋ねて見るが宜い、若し「有り」として證明することが出来ても、それは親が二人になるぢやないかと言はれた。この二人になるぢやないかといふことも大事な事である、佛教は往いては統一神の理想でありませすけれども、やはり信仰の中心は一といふ事を考へて置かなければならぬ、所謂貞女は兩夫に見えずとか、忠臣は二君に事へすとか、天に二日無く國に二王無しといふやうな事が信仰の統一を期する上に於て大事な事である。親孝行をするのにお父さんが三人も五人もあるとか、君に忠義をすると言つても君が四人も五人もあるといふことではいかんから、そこで忠臣は二君に事へすといふやうな言葉が大事な問題になつて來るのである。宗教の信仰もやはりその通りで、交代神教といふやうな工合に、今日は何を信する、翌日は何を信するといふやうなことは、信仰意識として洵に低いものである。それ故に佛教徒は、釋尊が三徳を有つてお居になるといふ事を認めた以上は、その信念といふものを動かさないやうにしなければならぬ。基督教に於ても「天に在ます我等の父」と叫んだならば、その父が幾つも出て來るといふやうなことは、基督教は決して言ひはせぬ、「お父さんが二人ある

天の父もあり様の下の父もある」……といふやうなことは言ひはしない。それは働きの上に於ては基督教は佛教と違ふ。基督教の神は全智全能といひながら、働いて出る場合には非常に拘束されて居る、それであるからあらゆる神なり他の宗教との調和が取れない、非常に排斥性を帯びて来る、故にそこに随分面倒が起つて来る譯である。佛教は包容性を以つていろ／＼な働きを認めるけれども、その根本に歸する時、一の絶対といふものを見なければならぬ。だから「父は二人かと責め給へ」——「お前の親は二人あるのか、本當の親と嘘の親か」「イヤ、どつちも本當の親だ」「それは妙な事ぢやないか」といふことになつて来るのであるから、この筆法は簡単な言葉であるけれども、日蓮主義としては忘れられぬ事である。今のドンドコ法華と稱する者は、「二人でも三人でも構はぬ、大體お父さんナンといふ者は俺は極めない、伯母さんや伯父さんは澤山あるけれどもお父さんは無い、孤兒ぢや」といふやうなことになつて居る。宗教の信仰意識といふものは、どうしてもそこが大事な事になつて来る、日蓮主義は舊い六百年七百年の歴史を経た宗教だけれども、餘程さういふ點がはつきりして居る、所謂佛教の正統教義を維持したる所の宗教である、他は所謂道統といふものが紊れて、横道になつたものである、だから好い加減なことを言つてその日／＼をやつて居る。日蓮主義に於ては——それは佛教以外の方からは議論があるかも知らんけれども、佛教の正統から考へたならば日蓮の言つて居ることが本當の佛教である。

## 日女御前御返事

この日女といふのは婦人の信者でありますが、それに對して御本尊の事に就いていろ／＼お書き送りになつて居る、その一節を御紹介します。

爰に日蓮いかなる不思議にてや候らん、龍樹、天親等、天台、妙樂等だにも顯はし給はざる大曼荼羅を、末法二百餘年の比はじめて法華弘通の旌じるとして顯はし奉るなり、是れ全く日蓮が自作にあらず、多寶塔中の大牟尼世尊分身の諸佛の指形木たる本尊なり。(繪圖遺文錄 一六二五)

これは日蓮聖人が顯はす本尊は、自分で勝手に拵へたものではない、又其處に字で書いてあるから有難いとか、木像にしてあるから有難いとかさういふ意味ではないので、釋尊から譲り與へられたる本尊の儘を日蓮聖人が書き記された譯なのである。その釋尊から譲り與へられるといふ事も、何も印判を譲られた譯ではない、その存在して居る所の實在の佛様の状態を其處に顯はして来たものである。曼荼羅式と言へば澤山の神や佛がそこに顯はれて居るけれども、これも前にいふ所の統一神の理想から言へば本佛釋尊を中心にして一切の働きを其處に見るので、「本佛は天の一月、諸佛菩薩等は萬水に浮ぶ影なり」と解釋せられた事は「開目鈔」にもあり、その他の有力なる御書にもある。日蓮主義の本尊とか曼荼羅といふものは澤山列べてあるから有難いと思ふたら大間違ひである。澤山に顯はれて居るが根本は

一つである、根本一にして斯の如く活動が無限であるといふ、その一天月、萬水に影を宿すといふ意味に於て本尊を見なければならぬ、唯だ雜然として澤山あるといふのは所謂眞言の曼荼羅式なので、それは宗教學の方からいへば宇宙神教とか萬有神教とか、又多神教とかいふ事に分裂してしまつて、洵に低い宗教の意識になる譯である。日蓮主義の本尊の一番大事な點は、本佛と、その活動との關係である。天月と萬水との關係である、それを考へないと同じ南無妙法蓮華經を唱へて居つても、その内容意識といふものは、萬有神教式の何でも宜い南無妙法蓮華經と今私がお話する所の日蓮聖人の正統教義である統一神教的の南無妙法蓮華經と二つある譯である。ドンドコ法華といふのはこの萬有神教的の南無妙法蓮華經であるから、狐を拜んでも狸を拜んでも何でも構はない、柳島に行けば妙見様を拜む、妙見様といふのは何だ、松の木の下に白い蛇が居るだらう、あれだといふやうな事を言つたり、或は何處かにかさ守の稻荷様といふものがある、之れを拜みさへすればかさかさが癒るといふやうなことをいつて南無妙法蓮華經をやる、洵に低い所の雜然たる宗教になつて居る。左様なものであれば、日蓮主義といふものは最も粗末な低級なる野蠻未開の宗教である。そんなものは佛敎ではない、名前は佛敎と言つても釋迦牟尼佛はそんな狐や狸を拜んで居れといふやうなことは決して言ひはしない、婆羅門敎でもそんなものはありはせぬ。それはモウ答にも棒にもかゝらん野蠻人のホンの野生的の宗教の中に、さういふ觀念があるのである、それを南無妙法蓮華經の言葉でやつて居るだけで、その性質を分解した時には非常

な劣等なものである、それが今日も未だ一般にあるドンドコ法華といふものである、そんなものは駄目ぢや。だから日蓮聖人の御紹介になるこの本尊、それは本佛と本佛の活動の上から見て行かなければならぬ、それを意識してそこに南無妙法蓮華經を唱へて居るのが日蓮教學の正統である。

佛法の根本は信を以つて源とす、されば止觀の四に云く、佛法は海の如し、唯だ信のみ能く入ると。  
 (編纂遺文録一六二六)

斯うお書きになつて、さうしてこの續きに信仰に關する言葉を澤山お擧げになつて居る。これは日蓮主義は非常に根柢の深い法華經に依つて、哲學風の意味も十分に有つて居る所の宗教ではあるけれども併し觀念をしたり自分の智慧を頼んで行く所の宗教ではない、何處までも信仰を本にする所の宗教である。さうして實はそれは佛敎の全體がさうナンである、何宗といふやうな宗に依つて違ふものではない禪宗は觀念であるとか、天台は止觀の行であるとかいふ、それはその宗を建てた人がそんな傾きを取つたのであるけれども、釋迦の宗教といふものは、一方には理智の方を聞いて行くけれども、併し之れを宗教として教として完成した時には、必ずや信仰である。それ故に佛法の根本は信を以つて本とするのである。その信といふのはどういふ事かといふと、これは面倒な問題であるけれども、佛敎では信といふものは、疑ひ無く正しき教、正しき眞理に對して、そこに自分の精神を打ち委せて、いろ／＼起る妄想を斷ち切り、いろ／＼起る動搖する者を抑へて、何處までも正しき教、正しき眞理に従つて行く決

心したるその精神を信仰といふのである。人間といふ者は、考へて見れば始終グラ／＼して居る者である、ちよつと人から話を聴けば「さうかな」と思ふ、「イヤ、さうでもないかな」と思ふやうな譯で、幾らでもグラ／＼する者である、それを何時までもグラ／＼さして置いては駄目であるから、そこで「これはモウ斯う決めなければならぬ」といふ、その正しき教の精神をピツタリ捉へて、それに反對したやうな考が起つてもそれを許さないやうにして行く、それが信仰である。無論佛教は研究を奨励する所の宗教であり、智慧を尙ぶ宗教であるけれども、何時までも研究とか智慧といふことに引つか／＼つて居つてはいけない、必ずや信仰を決定してかゝらなければならぬ、即ち信は一切の道の本である。唯だその信仰を決めるのが盲目的でないのが佛教の違ふ所である、他の宗教に於ては、信仰といへば「先づ信ぜよ」といふけれども、佛教はさうは言はない、「先づ信ぜよ」とは言はない、自分の了解の行くまで研究をさせる、正しき疑問といふものは佛教では大いに歓迎して居る、それ故に疑ひを起すことを奨励して居る位である。信仰の起る順序は先づ「動執生疑」といつて、今迄考へ込んで執着して居つた所の、或る定まつた精神が動いて「ハテナ、今まで考へて居つたのは間違ひであつたかな、併し今どう決めることも出来ないが」といふので、今迄の固着して居つた精神がそこに疑ひが起つて来る。丁度この頃のやうに氣候が暖かになつて来て、今迄降り積んで氷のやうに成つて居る雪が解けかゝるやうな有様である、それが動執生疑である。その次には愈々この疑ひを斷つて信仰に入るので、それを「斷疑生信」と

言つて居る。斯ういふ順序に佛教は許されて居るのであるから、疑ひを決して一概に否定するものではない、「先づ正しき疑ひを起せよ」「さうしてそれを斷ち切れよ」而して信仰に入れよ」といふ順序になつて居るものである。

本團擁護者吉田珍雄氏計

本團とは關係の淺からぬ吉田氏、陰に陽に擁護せられた珍雄氏は、悲しくも九月十五日午後四時長逝され、十七日谷中の瑞輪寺で告別式を営まれた。法號は 是法院殿珍雄日顯居士。眞に哀悼の極みであります。合掌  
南無妙法蓮華經

# 日蓮教學講座 (第一回)

文學士 河 合 陟 明

- ★ 我れ諸の衆生を見れば苦海に没在せり、かるがゆるるに爲に身を現せずして
- ★ 其れをして渴仰を生ぜしむ、其の心戀慕するに因つて乃ち出で、爲に法を説
- ★ く。(妙法蓮華經如來壽量品)

## 第一章 佛陀の人格的諸相

### 序 説

我々の人生の第一義の問題は「自己」を知る事である。「我」は何であるか、此の現實の存在乃至生前及び死後は如何なるものであらうか。然し我を知るには更に我の據つて立つ宇宙を知らねばならぬ。自己の眞實相を知らんとする問題は、自己と宇宙との

關係に入つて行かねばならぬ。凡てものは單獨に於てよりも、其の關係の相に於て更によりよく見られるものである。自己と宇宙の眞實相は、あらゆる思想學問の根本問題である。科學も哲學も皆之を探求し之を明かにせんとして進み來つたものである。學問を深く究めてゆくといふ事は、如何に自己や宇宙の神秘にして尊く又なつかしいものであるかとい

ふ事を知りゆく事である。然し人生や宇宙の奥底に知識の錘を以てしても測り得ない達し得ない深さを見出す時、どうしても宗教の世界がそこから開けて來らねばならないであらう。人智の要求即眞理の基礎に立ちつゝ否寧ろ其の基礎を掘り下げつゝ行くものが宗教の道である。古代ギリシヤの哲人が説きし如く、人智は驚きに始まつて遂に嘆美に終る、否信仰に終る、否信仰に入るのである。人間の知識の極まり果つる所その處よりして、信仰は靜かにして力強き其の運行を始めるといふのも亦味ひ深き言葉であらうか。眞に自我及び宇宙の深き眞理、その神秘その神聖その無限のなつかしきは宗教信仰及び實踐體驗の世界にのみ又この人にのみ恵まれる。我々はかくの如き一大學問即一大宗教を、佛教に於て發見し又此處に満足するのである。特に法華經に説かれたる佛陀の福音は、全佛教を包容して之に入眼點睛し、久遠無窮の基礎を與へ、更に法華經の行

者日蓮に依つてまのあたり示されたるその實踐的活釋、體驗的實證は、法華の本法に説かれたる實在界の眞相を生々しくも物語るのである。誠に法界の大觀を極めたりと云ふ可きであらう。我々が是の如き信仰に入つてみづからも實證體驗しつゝ深く洞察を加へゆく時は、即ち自己と宇宙との根源的如是相に觸れるのである。而て宇宙の奥底宇宙の神秘は遂に宇宙に實在する無限なる絕對者——久遠本佛の神秘尊嚴と無窮なる慈悲の温かさに觸れて行くのである。宇宙法界の一大中心たる慈悲の大人格——佛陀の優しき御眼から見れば、我々日常の心情の多くは如何にも粗糲荒涼殘忍薄弱なるものであるであらう。我々の粗なる思惟が思惟の法に背いて嚴正なるべき學術を傷つくるにもまして、吾人は自己の如何に殘忍無情であるかに氣付かず、情の理法を蹂躪して平然として居るのであらう。之によつて考へて見れば眞理は至つて柔和なもので、其の緻密にして堅き理

法、其の電光の如き機鋒は、吾人の粗暴輕慢なる心  
 情の眼には逸して仕舞ふのであらう。宇宙の奥底は  
 如何ほどやさしきものであらうか想像だも及ばぬ事  
 である。宇宙の秘奥、宇宙の秘密は、かくて「佛陀」  
 と「自己」との相互に交通し感應する神聖なる秘密  
 となり來るであらう。佛教は此の兩者の如實如是の  
 實相を教ふるものである。而て二者の中何れよりし  
 て先づ論ず可きであらうか。佛教の最高思想は圓教  
 と稱して、圓融圓滿具足統一せるを以て具體的眞理  
 のすがたと教へて居る。故に何れよりして出發する  
 も、其の内面的如是關係相によつておのづから他を  
 包攝し、之をも綜合的に説明するに至るものである  
 然し乍ら、由來宗教は人智を超絶せる絕對者の出現  
 活動及び其の福音的教説に據つて成立し我々の信仰  
 修行乃至一切の思想行動は此の福音的眞理の教權に  
 依つて自己を律するにある事より見れば、是の如き  
 教權の否宗教そのもの、源泉たる絕對なる權能者大

救濟者如來法王佛陀の實相を把握し來つて之を描寫  
 する事は宗教の根本的特質に觸るゝ所以であらう。  
 キリスト教學者の所謂「神を人間の側よりしてのみ  
 見るのではなく、神を神自身の側よりして見る」時  
 に於て、眞に能く全能なる神の姿を捉へ得ると云ふ  
 可きであらうか。之に反して先づ人間より出發して  
 人間の性情、本體、其の宗教心等よりして宗教を論  
 じ、或は人文歴史の一點に現れたる史的佛陀釋尊と  
 乃至其の教説よりして佛教を説かんとするが如きは  
 未だ必ずしも十全とはなり難い。何となれば、先づ  
 本佛の實在とその大慈應現とを會得し、茲に佛教の  
 興起を論じ來るに非ざれば眞實の佛教は把握し難い  
 からである。歴史の世界に於ける人類文明の王者と  
 しての佛教の背後には、更に時空を一括したる法界  
 の法王久遠本佛の人格の根本實在が之を包んで居る  
 のである、所謂現實の人生は、是の如き價值と實在  
 との統一としての絕對的現實界への目的論的進程に

立てるものである。されば又人間の側よりして之を  
 論ずるも、宗教信仰の第一の大事は、我が信頼する  
 絕對者の救濟如何の問題である。我が教主たり教主  
 たる絕對者佛陀が如何にして我々を救ひ護り恵み慈  
 しみ給ふか。我々は如何に佛陀に導かれ勵まされ慰  
 められ叱られ甘ゆるか——その佛陀大慈の力、働か  
 濟度神通利生説法、智慧功德一切の恩寵化益、それ  
 は抑も如何なるものであらうか、又我々が辛酸艱難  
 の人生に在つて、然も只之にのみ生の流るゝ之をの  
 み生と名づくるは、笑まるゝ確信と違る瀬無き憧憬  
 への——久遠の聖地への止み難き衝動に——ひたす  
 らなる信仰修行の最後の目的としての佛陀の證悟絶  
 對の人格を成就完成せんと願ふ其の佛陀の體相力  
 用如是果如是報不滅常樂の勝妙の淨境、それは實に  
 如何なるものであらうか。先づ價值を明かにして據  
 て以て之が實踐獲得に努むるは、鹿園の始より法華  
 の極説に至るまで世尊四諦の教説の要道である。抑

も佛陀と我々とは如何様に救ひ教はれるのであらう  
 か、大覺佛陀の大慈の全象面を明かにする事が、佛  
 教研究の根本義であらうと予は信する。此に於て予  
 は第一に「佛陀の人格的諸相」に關して續々講明を  
 試みるであらう。

第一節 佛陀の恩徳

佛陀觀の研究に就ては、人格非人格の論、或は實  
 在と因果との説を云々して、之を哲學的に證明せむ  
 と試むる者が多い。然るに日蓮聖人の御妙判(遺文)  
 は、第一着の指教に於て、道徳的に表象せられたる  
 事は尤も着眼を要する所であらう。固より哲學的眞  
 理の基礎は如何なるものに於ても、就中宗教信仰と  
 いふ如き我々にとつて絕對的事實に關しては最も權  
 威あるものとして要請せらるゝ所である。然し之と  
 同時に、むしろ之にも増して尙道徳的情操は吾人の  
 最深秘處より發する深き要求である。宗教及び倫理

は吾人の先天的理性感情に根據し、而て理性感情は尊敬感情となつて現るゝのである。子として親の尊き事は理論を待つて後知るのではない、人間の本能なる先天的靈智である、本具の理性感情である。師主に對しても亦然りである。人間情操の深い要求には、其處に眞理の核が宿つて居る。否むしろ眞理に據つて基礎づけられ居るものに非ずんば、我々の嚴肅なる道徳的情操に於て深き人格的要求として現れ來らないのである現れ來る事ができないのである我が大日本國民として天皇の御稜威に伏しまつるが、尊嚴にして悠久なる國體と歴史との生みなせる國民感情の粹粹である。人間の至誠が、家庭に在つては父母の慈愛の下に、進んで學校に在つては師の教の正義の下に、更に力の世の中としての社會生活に在つては國家の我が大君の威徳の下に開發され練磨され修養安住するに至るのであるが、かゝる人生々々の三範時を、更に今一步擴大して之を宇宙的

に大觀し、全宇宙の根本中心として、如上の愛と正義と力と所謂主師親の三徳を終窮無盡に一身に圓融具足したる一大靈的絕對者大涅槃の境界に於ける大覺佛陀の人格的根實在を論明し、實證し、光顯し此の生ける法界の本尊たる本佛即此の現實界の大師父として我が釋迦牟尼佛を信賴し尊敬すべきを教へられたる日蓮聖人の信仰は、實に深き所以ある事である。聖人が佐渡流瀆の雪中に在つて縊しや身は死するとも魂魄をば此書に留むと血涙の思を絞つて骨を筆とし皮を紙とし血を硯の水となして畢生の大主張を綴られたる聖人第一の遺書開目鈔の開卷劈頭に「夫れ一切衆生の尊敬すべきもの三あり所謂主師親是れ也」とあるより見るも、是れ理論的に講明するに非ず、又「壽量品を知らざる諸宗の者は畜生に同じ」と説き給ふたのも、知恩報恩の道徳的情操に訴へたへ、以て釋尊の絕對的尊嚴を唱道し、是に對する無窮の信賴と尊敬とを誠告するにあつたのである。

此の思想の由來する所は全く法華經の教旨より來つて居る。彼の金剛般若經の「佛は相を以て見るべきに非ず」と云ひ、又阿彌陀經の「彌陀を專念せしむ」と云へる類ではない。全く倫理道徳の思想を根本として、我が現實出現の慈悲深重の釋尊を顯本として此の道徳的大家格の現實救済の大因縁を高調したるもの、是れ實に經王法華の教詔たるものである。佛教統一の經典として所謂經王法華は徹底的人格中心の宗教である救済教である。方便品より既に其の意趣は昭かであつて先づ天地宇宙の實相を説き、其の要諦は直ちに我々の本來具有せる佛知見を開くといふ佛性開發の事に及び、更に此の開發の師父として佛陀の慈智の恵に依つて我等の佛性は導かれるといふ事を説いて居る。即ち宇宙の「諸法實相」より「開佛知見」といふ佛性論に進み、更に進んで佛陀の大慈悲救済を説かんとして、而も佛眼を以て迷界の群生を觀見すれば、まことに罪を以て罪を消し苦

を以て苦を捨てんとする迷者可惑の狀を放擲するに忍びずして、益物（物とは衆生の義）濟度せしは慈悲の發動なるを示して「我以佛眼觀見六道衆生……乃至……而起大悲心」と説き、續いて譬喩品に至つても三界火宅の喩を出し、兒童が火宅に遊戲するを衆生に譬へ「今此の三界は皆是れ我が有なり其の中の衆生は悉く是れ我が子なり而も今此の處は諸の患難多し唯我れ一人のみ能く救護を爲す」と説いて有名なる主師親の三徳を宣言し表明せられ、茲に佛陀の尊き親愛なる意義即ち佛陀大覺の慈智光が直ちに宇宙の中心より放射せられてゐる事が現れて居る。又次の信解品に至つては、大富長者なる父なる佛陀がかの只僅かに少しくを得ば足れりとなしつゝ、甘んじて貧人乞食の流浪の旅を續け居る我が愛子を漸くに探し求めて父子再會し、遂に貧賤の窺見より長者子の大自覺に還つて父の家督を譲らるゝといふ此等の聖語を拜するに皆實に血涌き涙溢るゝの温情

ならざるはない。又藥草喻品には、炎熱の旱天に大雲遍く覆ひ枯涸の衆生を洩潤すと説かれてゐる、大雲とは今番出世の佛陀慈悲と智慧との結晶せる我が釋尊を指す者であつて決して彌陀大日等の他佛ではない。又冷々たる非人格的眞如法性の理佛にも非る事明かである。故に聖人は本經の旨致に依り祖書中に、大日彌陀藥師等を本尊と爲す可からざる所以を痛論し給ふて、多くは道德的の斷論を下されて居る是の如き道德的指教になれる佛陀觀は實に本化獨得の妙致である、後段更に詳説するであらう。

今佛陀の恩徳論就中主師親の三徳に就て、聖人の遺文に顯れたるものを體系的に類別するに凡そ四方面がある。

- 第一、降誕の因縁に約す、
- 第二、誓願の因縁に約す、
- 第三、化導の始終に約す、
- 第四、常住の妙化に約す、

苦を離れて安穩の樂世間の樂及び涅槃の樂を得せしむ (藥草喻品)

我は世尊たり能く及ぶ者無し、衆生を安穩ならしめんが故に世に出現して、大衆の爲に甘露の淨法を説く (藥草喻品)

汝諸人等は皆是れ吾子なり、我は則ち是れ父なり汝等累劫に衆苦に燒かる、我れ皆濟拔して三界を出でしむ (譬喻品)

我も亦これ世の父、諸の苦患を救ふ者なり (壽量品)

抑も今の釋迦牟尼佛の人類に降誕し給ひし目的は我等人生々活の上に幸福を實現し、兼ねて未來永遠の本體的生命を救ふて常住不滅の佛果を成就せしめんが爲に來り給へるのである。先づ世間に出で、は我等の愚痴暗鈍にして區々たる妄想裡に苦悶せるを愍念し給ふて、先づ此の直接の苦悶を除いて歡喜法悦を得せしめ、更に進んで不滅の生命に無限の向上

第一は歴史上の釋迦即ち娑婆出現の釋迦佛を指すのである。若し彌陀大日等大慈悲の盡發止まざるものあらば、何ぞ此の娑婆に出現して化益を施さざるや只高い遠い處に居るのみでは到底濟度の目的を全うする事は出来まい、されば必ずや此人生に隨應し其のたゞ中に出現して、我等と同じ情意を具へて、尤も適切なる教化を垂ればならぬ、釋尊は現に人の子として此世界に降誕し以て絶對の智慧を發射し給ふたのである。以て其の慈悲因縁の尤も深厚なる事を知るべきである。

法華經に云く、

我は是れ如來なり、未だ度せざる者を度せしめ、未だ解せざる者を解せしめ、未だ安んぜざる者を安んぜしめ、未だ涅槃せざる者には涅槃を得せしむ、今世後世實の如くに之を知る、我は是れ一切知者一切見者なり、知道者開道者説道者なり、世間に出づるは猶大雲の如く、一切枯稿の衆生を充潤して、皆

を遮らしめて、我等を最上の妙覺に登せ無上菩提を成辨し佛身常樂の大果報を獲得せしめ給ふのである「大雄猛世尊常に世間を安んぜん」と欲し給ふ」此の釋迦牟尼世尊の恩恵を思ふては我等は感謝讃嘆の言葉をしらぬのである。あ、佛陀よ、あ、大尊よ、あ、大慈よ、あ、大宅よ、あ、大歸よ、我等を憐愍し我等を救護し、三界の眼となりて失路に路を示し給ふ大智炬の燈明よ、世間を憐愍し給ふ大醫王よ、あ、我が尊よ、あ、我が大善知識よ、あ、巧説微妙の美言よ、あ、行歩如師子王よ、あ、行歩如大牛王よ、あ、行歩如大象王よ、あ、演暢甘露法王よ、

善い哉諸佛教世の聖尊を見たてまつるに、能く三界の獄より諸の衆生を勉め出したまふ、普智にして天人の尊、群萌類を愍哀し能く甘露の門を開いて廣く一切を度したまふ、世尊未だ出でたまはざる時は、十方常に闡顯にして三惡道増長し阿修羅も亦盛んなり。諸天衆うたゝ減じ死して惡道に墮つ、佛に

従つて法を聞かず、常に不善の事を行じ、色力及び智慧新れ等皆減少す、罪業の因縁の故に樂及び樂の想を失ひ、邪見の法に住して善の儀則を知らず、佛の所化を蒙らずして常に惡道に墮つ、佛は世間の眼と爲つて久遠に時に乃し出でたまへり、諸の衆生を哀愍したまふが故に世間に現じ、超出して正覺を成じたまへり、我等甚だ欣慶したてまつる、及び餘の一切の衆も喜んで未曾有なりと嘆じたてまつる、願はくは此の功徳を以て普く一切に及ぼして我等と衆生と皆共に佛道を成ぜしめたまへ (化城喻品)

佛陀與世の大因縁は、苟くも佛教なるもの、一切の義門の根本源泉なるが故に、上來佛教統一の經典としての法華經より、其の文證たる如來出現の讚佛偈を摘出したのであるが、更に今後の論明の基礎地として、一層廣く大藏一切經の裡より代表的經典を撰んで、此の降誕成道の大化益を讚嘆し奉らう。大藏經の組織的分類は正明なる佛教統一の先驅者と

善目照知して心に喜慶す

一切世間の眞導師

救と爲り歸と爲つて出現したまふ

(同品)

又云く、  
生老病死憂悲の苦

世間を逼迫して暫くも歇むこと無し

大師哀愍して誓つて悉く除きたまふ

如來の眞身本無二なるも

物に應じ形に隨つて世間に滿ち

衆生各其の前に在るを見たてまつる (同品)

又云く、

如來の出世には甚だ値ひ難し

無量劫海に時に一たび遇ひ

能く衆生をして信解を生ぜしめたまふ

佛は法性は皆無性にして

甚深廣大不思議なりと説いて

して、日蓮聖人の基礎を据ゑられたる天台大師の五教判に據り、華嚴、阿含、方等、般若、法華涅槃の順に隨ふこととする。先づ華嚴部の主典たる華嚴經を經くに、開卷劈頭讚佛偈の幾十幾百を以て充滿してゐるのであるが、其の中より僅かに二三の文を抄録しよう。

如來法王世間に出で、

能く照世の妙法燈を然す

如來の智慧は無邊際なり

如來の功徳は不可思議なり

衆生見る者は煩惱滅し

普く世間をして安樂を獲せしめたまふ (世主妙嚴品)

又云く、

衆生は業惑に纏覆せられ

橋慢放逸にして心馳蕩す

如來爲に寂靜の法を説くとは

普く衆生をして淨信を生ぜしめたまふ

三世の如來は功徳滿じて

衆生界を化すること不思議なり

彼れに於て思惟せば慶悅を生せんこと

是の如きは樂法能く開演す

(同品)

かくて開覺成道の三七日、菩提樹下の金剛寶座に自受法樂の禪定に住し、悟後の觀念に耽りて大理想實現の冥想成りし大覺世尊の光顔巍巍々々寂靜の尊容は淨澄の信を湛へ慈智の光を輝かして勝者智者覺者無上師、すなはち梵天の勸請に應じ先づ鹿野苑に向つて初轉法輪不死の法鼓を打ちたまひし阿含説法の金文には、

世尊諸の比丘に告げたまはく、若し一人あつて世に出現すれば多人を饒益す、衆生を安穩し世の群萌を惑み天と人として其の福祐を獲せしめんと欲す、云何が一人と爲す、所謂如來應供正徧知者是れなり、若し一人あつて世に出現すれば便ち

智慧の光明あつて世に出現せん、云何が一人と爲す所謂如来應供正徧智者是れなり、諸の比丘よ當に信心すべし、佛に向ふて傾邪あること無かれ、若し一人あつて世に出現すれば無明の大冥、便ちおのづから消滅せん、是の故に諸の比丘よ當に當に佛を恭敬すべし、是の如く諸の比丘よ當に是の學を作すべし、若し一人あつて世に出現すれば爾の時に天及び人民便ち光澤を蒙らん、便ち心に戒開施智慧を信する有らば、猶ほ秋時の月光盛満して塵穢無く普く照す所あるが如けん、若し一人あつて世に出現すれば、爾の時に天及び人民皆悉く熾盛ならん、三惡の衆生は便ち自ら減少せん、諸の比丘よ當に佛を信向すべし、是の故に諸の比丘よ當に此の學を作すべし、若し一人あつて世に出現すれば與等者無けん、模則すべからず、獨歩侶なく倚匹あることなく、諸天人民能く及ぶ者なけん、是の故に諸の比丘よ當に佛を信

敬すべし、是の如く諸の比丘よ當に是の學を作すべし（増一阿含經）

又云く、  
如来至真等正覺、此を一人出世すれば此の衆生の類便ち壽を増し算を益し顔色光潤氣力熾盛快樂無極音聲和雅ならんと謂ふ（同經）

又云く、  
比丘よ、我れ今出世す、如来無所著等正覺明行成爲善逝世間解無上士道法御天人師にして佛來祐と號す、我れ今日自ら饒益し亦他を饒益す多人を饒益し世間を感傷す、天の爲め人の爲めに義及び饒益を求め安穩快樂を求む（中阿含經）  
此等の文を拜すれば如何に釋尊の出現に依つて大衆は利潤を蒙り満足を誦ひしかを知得する事が出来るであらう。執見一たび去らば如来の明教は日月の昭々たるが如く各人の頭上を照し居るに氣付くであらう。南無妙法蓮華經（續）

### 左翼闘士の轉向

左翼運動の巨頭河上博士の轉向を動機として所謂社會運動の大小の闘士達の轉向が著しく流行して來た。明治三十八九年頃、たしか讀賣新聞紙上であつたと思ふが、私は、當時まだ一介の青年であつた河上氏の「社會主義評論」といふのを熱心に讀んで幼稚な頭をひねつたことを記憶してゐるが、それ以來著述に講演に屢々博士に接してゐるので、博士の現在の心境には殊の外同情を寄せてゐる一人である。併しながら如何にそれが同情すべきものであるかは云へ、僅かの期間の獄裡生活のために掌の裡を返へした如き轉向は餘りにも呆氣ないものに思はれてならない。過去三十年に近い博士の言動は相當多數の青年の進路方向を決定した筈だが、博士は今後どうしてそれ等を清算さるゝ所存であらうか。博士が今

### 上田辰卯

後如何にしてその責任を盡されて行くか々氣遣はれてならない。  
その外の大小闘士達の無責任はまたあまりにも露骨である。新聞の傳ふる所が若し眞實であるとすれば、彼等の中には一二女性の涙でもろくも同志を賣つたものも相當あるさうである。轉向必ずしも悪いものでなく寧ろ過ちと知つたら潔く過去を清算することこそ聖の聖なるものと思ふが、然しながらそれと同時に今後の旗幟を鮮明にして過去に率ひた人々を新たに指導して行く生活を示すことは極めて肝要である。然らざればたゞ現實の痛苦に堪へ兼ねて一時を糊塗し子弟を賣つて出獄を企てたといふ男子としての最大の恥辱を物語るものに過ぎなくなつてしまふのだ。

秀吉や秀次がキリシタンを虐殺したことはあまり明らかでないが、下つて徳川時代に入つてからの基督教弾壓の史實は誠に明瞭である。捕へられて斬罪に處せられたものその數幾百人かを知らないが、然も彼等は文字通りに死を見ること歸するが如く、刑場に於て轉向を聲明して死を脱れんと企てたものはさう多くはないやうである。當時の人間が單純であり今日の人達が複雑であり利巧であるがためかも知れない。然したゞそれ丈の理由でこれを片付けてしまふ譯には行くまい。恐らくそれよりも彼等の懐く信仰と此等の思想との内容の相違がいざ人間生活の最後といふ土境場になつて前者には美しい殉教の夢となつて現はれ後者には醜い生への執着となつて現はれて來たためではあるまいか。來世の安住即ちより美しきものへの更生を信する者達へ向つての死罪は何等の威嚇とならないが、死後を否定するのみか現世に於てもたゞ物質のみを対象として構成されたる思想の前には一日半時の牢獄も鋭い恐怖となるのは當然である。

英國に於て労働黨が天下を取りその首領マクドナルドが内閣を組織したのは千九百二十四年であつた當時自由黨がアスクイス、ロイドジョージと相争つてゐる機會に乗じて労働黨が俄かに進出したためであつたとは云へ舊習保守の代表國とも云はれる英國に於て労働黨が政權を握つたことは世界の驚異であつた。そして又必ずしも學理的にはマルクスを鵜呑みにしたものでないとは云へ少くとも資本家階級を打倒して新らたなる經濟組織の構成を標榜したこの内閣が、果して如何なることをなし得るであらうかといふことは世界の注目する處であつた。これは實に社會主義内閣の試金石であると共にその成否は社會主義學說の當否を露骨に示すものとして頗る興味をもつて迎へられたのであつた。

然るにその成績はどうであつたか。先づ第一に世人を失望せしめたのは、當然社會主義を標榜すべき筈の労働黨が内部の一致を缺いて完全なる社會主義政黨になり切れないことであつた。この労働黨内閣が議會に於て資本主義弾劾の決議案を提出したのは

組閣直後僅かに一回であつてそれ以外に於ては主義に於ても政策に於ても資本主義の根本に向つて戰を挑んだことは遂になかつた。彼は政權を取つても社會主義經濟組織を實現しやうと企てたことはたゞの一度もなくして了つたのである。

第二次の労働内閣が成立したのは千九百二十九年であつた。第一次内閣に於て名實餘りにも伴はなかつたために、この時の世人の待望は最早甚だしく薄らいでしまつたが、それでもまだ相當の興味は彼等の上に注がれて居つた。然るに不幸にも千九百三十一年世界を襲ふた恐慌は完全に労働内閣の無爲無能を暴露して終に四分五裂僅かに五十數名の黨員を議席に残すのみとなつて政治的生命は終つた。

そこで先づ誰でも考へることは一體何故に労働黨は一國の政權を握りながらその主義とする所を實現出来なかつたのであらうかといふことである。前にも述べた通り英國の労働黨は必ずしも哲學的にマルクスの體系を受継いだものではないが、然し資本主義を覆滅して労働者の統率する社會を構成しやうと

する根本に於ては無論相通するものがあるである。それが在野黨の時代ならいざ知らず政權を握つて尙且なすべき何ものもなかつたといふに至つては實に言語道斷である。私はその理由に就て或人は労働黨が絶對多數黨でなかつたために絶えず自由黨保守黨に牽制され、それがために思ふやうな政策を斷行されなかつたのだと辯護する人もあるがそれはたゞ辯解に過ぎない。若し眞に自己の信する道が正しく又それによつて一國が安きに置かれるなれば單に議席の數位に拘束されず他にいくらでも實現の方法はある筈である。私は労働内閣の無爲に了つたことは議席の絶對多數か否かといふやうな單純な理由でなく所謂社會主義なるものが、實際の人間生活——今日行はれてゐる所の人類の經濟生活の必然性を無視してたゞ學者の机上論から出發した結果いざ政治の執行官となつて見ると理論と實際とに多分の噴違ひを生じ何もかも議論倒れとなつてしまつた結果に外ならないと思ふ。現に第二次労働黨内閣の没落後千九百三十一年に行はれた總選舉に於て何故に労働黨があつたやうな惨めな敗北を招いたかといふにそれは

全く反對黨の政策に對抗すべき何等の政策なく反對黨の反労働プロバガンダに一言の反駁さへもなし得ず労働者自身の投票が資本主義政黨なる保守黨自由黨に集まつたのを見ても明らかである。労働黨がその主義を忠實に實行せんとすればたゞさへ金の流出に悩んでゐた英國の財界は即座に破壊するだらう。さうすれば労働者達が日々受取り且つ流通する英國の紙幣は忽ち惨落し物價は暴騰してその瞬間から一番困るのは労働者自身である。資本及生産機關を沒收して政府自ら行はんとすれば勢ひ他の資本主義國との通商貿易の斷絶を期せねばならない。然らば自給自足經濟はと云へば英國は食料品の輸入なくしては一週間を経ずして國民悉く餓死せねばならない状態だといふことは周知の事實だ。即ち社會主義政黨がその主義をそのまゝ實現せんとする前には實に豫想だもされなかつた困難な經濟界が投げ出されることがこの時初めて解つたのである。

苟も一國の社會組織を改變しやうとするものが、その改造の過程を深く研究しないといふことがある

構造形態は如何なるものであるかと探して見ても解らない。従つて現在の資本主義社會と所謂新社會との比較研究をしやうにもその手が、りさへもないのである。社會主義は即ち破壊主義であつて建設がないといふのは必ずしも資本主義者の惡口ばかりではない。かくの如き無責任なる學說に基いて組織せられたる労働黨が政黨として野倒れともいふべき政策の行詰りで崩壊したのは極めて當然といふべきである。成程資本主義の解剖のメスは鋭い。否定も極めて力強い。従つて現在の社會に漫然と不満を感ずるもの、又は惠まれざる人々に單純に寄せる同情等々から社會主義に走るものが多いのであるが、それは云はゞ一種の衝動に過ぎないものであつて一度新社會の構造に考へ及ぶときに必ず行詰りを感ずるのである。私は讀んだことはないがゴータ綱領批判の中に僅かに數言マルクスの考へた新社會の状態といふものが記述されてあるさうだが、然もそれは實に夢のやうな、國々も人種の差別も悉く消滅した自由なる樂園といふのであつて、かゝる子供だまし如き社會形態は少くとも過去現在の國民生活を研討して

だらうか。英國の労働黨に限らず何れの國にしてもさうである。今日世界的に通商貿易を營んで資本主義の下に貨幣制度を確立し、信用の發達によつて經濟生活をなし來つたものを一朝にして改造しやうとすれば、その前には實に想像も付かない混亂が生じてくるのは當然である。そしてそのやうなことのなことを前提として發達して來た經濟生活——例へば通商貿易の發達のために狹隘なる國土にも多數の人口を收容し得たといふやうなことでも根本から動搖——破壊されて行くことは眼に見えてゐることである。

英國労働黨の末路があつたといふことは單に英國の地理的關係のためばかりではない。元來社會主義といふものが破壊と否定と丈あつて建設のないのを特長としてゐるものなのである。社會主義者のバイブルともいふべきマルクスの著書の何處を見ても社會主義社會の施設状態を記述したものは一ツも見當らないさうである。實際我々が「資本論」を讀んでも資本主義の解剖と否定とは實にくど過ざる程記述されてゐるが、然らば破壊後に於ける新社會の來た人達の到底承服し得ない處である。

社會主義に對しての學理的な研究批判をこゝでするのは私の目的ではない。又學術の議論は學者にまかせる方が巧妙にやつてくれるだらうが、一應これ丈考へて見た丈でも左翼闘士の轉向の原因が窺はれるやうな氣がする。社會主義者の中には自己の現在の境遇から打算したのもある。社會主義を自己の生活の資料としてゐる寄生虫もある。世界見ずのお坊ちゃんやお嬢さん達のセンチメンタリズムから出發したのも少くない。たま／＼國家の彈壓が却つて反抗心を煽つてそれに双向ふことが如何にも勇者の如く義人の如き錯覺を起したのが大多數なのだ。従つて彼等にはたゞ破壊心反抗心のみがあつて安住の地點といふものは一ツもないのである。宗教の信仰をなすものがその絶對者と常に接觸して死を境としてその懐にいだかれる境地とは到底比較すべくもないのは當然だ。本來利害損得の打算から出發したもので然も死後の存在を否定したものに何で生命を賭した行動が貫ける道理があらうか。さればこそその反抗

の途上に於ては一見殉教者の如き熱意と意氣とを示すことがあつても一度捕へられて静かに反省しその興奮から脱すれば一ヶ所として安住すべき處なく轉向に次ぐ轉向で遂にその組織は崩壊してしまふのである。社會主義の潮流は華々しく恐ろしく感ぜられ、それがためあるものは宗教の殉教者と混同して國家の彈壓が反つて彼等の結束を堅ふするが如く説くものもあるが私は決してさうは思はない。宗教は死をもつても威嚇し得ないものであるが、社會主義は一條の鐵鎖でよく轉向せしめ得るものである。國家の徹底的の彈壓で彼等の巢窟を一掃し永く青年男女の迷路を斷つことを望んで止まないものである。



## 日蓮聖人讚唱の詩

東北福島の地は、日蓮大士滅後百年の當時、紛亂邪執の教界裡古稀に垂んとする老齡を以て、決然捨邪歸正し以て大士が法統の正脈を紹繼して起ちし日什老師の誕生發心又終焉の地である。地に靈應あるかに冥助あるか又此の地は、我等が漸く社會の一隅に聲を擧ぐるに至らんとせし去歲夏七月、本部會堂建設の日に先だつて、同志が始めて説法を試み、福島市民有志の士女本團支部を此地に設けんとするあり、並びに同地高商日蓮聖人鑽仰會の學生諸君の招請に應じて、予は爾來各月「本經」「祖判」を中心とせる法筵を開き來つたのであつた。たゞ、今年夏七八月、同地に足跡を印してより一星霜、休暇を以て宇都宮の家郷に歸省し居たる鑽仰會の學生中山喬司君は、日蓮聖人讚唱の一詩を詠じて予に送り來るる法華行者の靈骨、日蓮主義者の氣魄を荷へる同君の詩文、一讀して朗々予快哉を叫び、二回三四五六回讚唱措く能はず、遙かに窓外團々たる白雲青天を睥睨

### 盛岡市法華寺田口公信師晉山式

顯本法華宗東北の名刹盛岡市法華寺に新任職として赴任された田口公信師の晉山式は、八月五日同寺に於て舉行せられた、この日早朝より詰めかけた檀信徒は既に午前十時定期前後には本堂を埋めたるの概があつた。特に同地の篤信家中村市長、宮市會議員、小泉市會議員、釜川市會議員、石川市會議員、小林醫學博士、富田女子商業學校長等を始め多數有力者の列席ありて式は定刻十時、東京より同地に赴きたる池澤泰明師、鈴木秀學師、同教區の渡邊日研老師、小原師、伊保内師の參列ありて莊嚴の中に傳燈法要を執行して法味を言上した、法要後田口新任職起つて晉山の挨拶を述べ、中村市長檀信徒を代表して同市に於ける唯一の本化法戰の道場はその人を得たるの歡喜を述べて一場の祝辭を終り、最後に宮總代諸方面よりの祝辭、祝電の披露あり極めて嚴肅な法悦の中に静なく晴れの晉山式を終了した。

して撫然たるもの久し矣……あ、信仰的氣概と藝術的詩想と相寄つて以て此の吟詠を成せるもの、聞く君郷里の學窓に在りし少年當時、慈母につれられて寺門に參詣し、いや／＼ながら法話を聞き居たりしも、忽然として佛縁に接し經の威力を以ての故に否或は正に宿縁頓に薰發したる爲か、遂に信仰に入るに至り、今や高商の鑽仰會に於て具さに其の發展の策を講じ居るの士、君の信仰が其の詩才を驅つて茲に此の風懷掬す可き讚偈を生むに至りしもの、所以なきに非ず、誠に近來會心の作に接してや、うたゝ我が心境に鼓動共鳴し、英氣朗々愛吟してやます予たま／＼今夏始めて鎌倉の海に泳ぎ、而もかの往昔日蓮大士が憂國護法の熱情もだし難く、立正安國の大警策、王法佛法の大義名分を以て斷乎幕府を諫曉膺懲し、逆臣北條の一族を叱咤痛撃せしも、頑愚暗短の政權軍權者流一毫も顧みざりしのみかは却て不當強剛なる彈壓を加へ、痛むべし名師國賊と貶せられて忽然伊豆伊東に流謫せらるゝに至りし時維れ弘長元始麥秋の空、五月十二日由比ヶ濱邊に弟子日朗と悲痛なる別れを爲し給ひ、かの千歲聞くが如し

沈痛の語、「日、東天に登らば日朗鎌倉に在りと思は  
ん、月西山に傾く時は日蓮伊東に在りと知れ」と水  
波漂渺の間に孤舟影を没してあゝ波は高く風は激す  
斯の濱を奈何せん、佇立す師弟惜別頻りなり、あゝ  
予實に此の由比ヶ濱に遊ぎ、而て思ふ、今や足一度  
ひ鎌倉驛頭に降り立つや、いはゆる近代の明朝新鮮  
なる感覺美を競ふ青年子女才子佳人が、潑瀾として  
健康なる彈力ある肉體美を燦々たる烈日の下に誇り  
がに曝しつゝ、絡繹として蠟集來往するてふ帝都の  
近傍隨一の樂地と化せるを見、翻つて思ふ、此の地  
ぞ實に曾ては日蓮大聖人が大説法活動の靈地なりし  
か、彼の小町夷堂の當時をしのぶ「日蓮大士辻説法  
の靈跡」は、今尙傳來の御腰掛石を安置して春風秋  
雨七百年の歴史を默説せるが——あゝ夫れ此の地を  
今や訪るゝ者、果して如何大聖人當年の大主張を知  
るや知らずや……

圖らず今日中山君の吟詠に接し、君と共に遙かに  
大聖人の雄風をしのびて追慕讚嘆の情そらろに深く  
感奮興起の氣毅然として眉宇を壓するを覺え、あゝ  
起たすんばあらず、起たすんばあらず、非常時日本

横手が原におく露は  
肌うす寒き光りなり

佐介ヶ谷の狩座に  
的矢を競ふ若武者も  
こまの踏の音たかき  
古強者の影すがた  
消えて平和となりければ  
人は集ひて世は榮え  
大路小路のにぎはひは  
都の春にまさりけり

その鎌倉の鎌倉や  
繁華雑踏こゝは又  
冬霜踏めぬ夷堂  
續き隔てし町角に  
押し寄せ返す人波の  
塵埃を浴びつつ忽然と  
巖のごとく喝然と  
浮きでし如き怪僧あり

と日蓮聖人——「祖國日本と日蓮聖人！」おゝ其の  
リズムの微妙の調和よ……又以て此等若き青年學徒  
の、新日本建設の將來を荷つて立つべき職責使命を  
双肩に感じつゝ、「日蓮聖人鑽仰」の叫び、福島高商  
の一角より滿天下の學徒青年はた又子女の間に澎湃  
として怒濤の如く波及し至り、我が大信仰の幾多の  
俊豪が宛かも地涌の菩薩のそれのごと陸續として涌  
出し來るに至らん事を……あゝ予望んで止まず、望  
んで止まず。南無妙法蓮華經。(河合陟明)

## 辻説法

福島 中山喬司

險嶺越ゆる旅人の  
袖に秋風しむるれば  
富士の高峰は白雪を  
いただき 秋の鎌倉は  
御輿ヶ嶽の虫の音も  
淋しき中に閑雅なる

権門富貴の歸依を得ず  
瓔珞幡蓋のほかなれば  
風雨に曝さるる顔面は  
あくまで黒く鐵の如  
俗も厭はず世も避けず  
宗義の苦行つみければ  
旭陽のそれ眼差しは  
四邊を壓して物凄し

生れながらに骨太の  
自然と肉は引き締り  
いはほも疊む三十四五に  
あほく身丈は六尺の  
力あふるゝ節々に  
悪鬼もひしぐ様見ゆる  
清氣は透る秋ぞらに  
麻の衣に しろ單衣

手首に太き珠数を巻き  
胸に無紋の袈裟をかけ  
鐵脚素足に半草履  
圍みし群集に抽ん出し  
よるき頭をそば立てし  
腹より出でて胸を衝く  
轟きわたる第一聲  
我は日蓮法華經の行者

東天紅の鷄の音も  
松葉ヶ谷は空蟬の  
露いと繁き秋草を  
踏別け出でて街頭に  
宗義が故に身を捨てて  
權門邪教を敵としつ  
五濁惡世を打深め  
逆化折伏を誓ふなり  
群衆悟らねば様々に  
名越の里の妖僧ぞ

一時に騒ぐ群衆が  
耳おほふ同なき第三聲  
念佛無間 禪天魔  
眞言亡國 律國賊

向上一路を踏みはずし  
大日密の教さへ  
光を滅する奇怪物  
破戒破律を望みたる  
陰魔邪法の不敵さど  
呆れ果てたる群衆が  
打見る中に日蓮が  
音太き聲の説法なり

醒めよ人々仰ぎ見よ  
天日二なく地王無二  
ましてや十方法界の  
大恩教主釋迦如來  
未顯眞實四拾餘年

聽きて惑ひて殊更に  
難行に罪に墮つるなど  
罵る者のその中に  
彌陀の怨敵念佛の  
外道よ懲せ倒せよと  
拳にざりて迫るあり

哀れ住まむに寺もなく  
狼狽へ騒ぐ賣僧ぞや  
嘯けと笑ふ者もある  
怪怒潮動揺ぐ人波を  
意とせず大型日蓮は  
眼を閉ちて掌を合せ  
虚空にひらく第二聲  
南無妙法蓮華經

六十餘州の經文に  
古今に聞かぬ叫喚なり  
惡魔波旬の變化かや  
妖僧 邪僧 非人よと

涅槃の雲に入るかどに  
一世の結經となされしは  
妙法蓮華經の唯一乗ぞ

今後愛讀者諸君の論說詞藻時評隨筆等その何たるを問はず誌上に掲載すべければ、奮つて投稿あらん事を乞ふ、以て統一誌は眞に「讀者の統一」と爲るを得んか、豈吉き事に非ずや。

(以下續く)



蘭室往訪記

礮部 満事

三八

秋とは名のみの暑い午下りにカン／＼照る中をば大師河原池上新田の池上家を訪づれた。

池上家は攝政藤原忠平から出て、忠平の三男兵衛祐忠方が、平将門の亂に東下して以來武州千束の郷千束池畔に住まつて居た所から、池上の姓を名乗られたといふことである。

其後第十世康光こそはかの日蓮聖人との御縁の厚かつた宗仲、宗長兄弟の嚴父で、左衛門尉と申ししたが、其妻は大聖人六老僧の第一日昭上人の姉である。

宗仲は建保元年生れで、正五位ノ上右衛門大夫に陞り幕府の作事奉行であつた、初め康仲と稱して居たのが、建長年中に關東の工匠等が反亂した時、康仲は勅を奉じて之を訓諭鎮靜せしめた爲め、宗尊親

王御威の餘り、御諱の一字を賜はり、宗仲と改め、以來名聲大に揚つたと傳へられて居る。

宗仲は、初め禪の信者であつたが、日蓮聖人御開宗三年後の康元元年に、弟の宗長と共に歸伏し、法華經を信する身となられた、併し世の中は思ふやうに行かないもので、父の康光は深く極樂寺の良觀房に歸依して、親子の間がシツクリと行かない、遂には親の權威を以て子等の信仰を捨てさせようとしたが、兄弟は俱に力を併せて飽くまでも其の正しい信仰を貫かんとし、果ては遂かに身延の恩師の示教をも請ひ、策勵の御消息をば頂かれたのであつた。

有名な「兄弟鈔」は能くこれを物語つて居られる大聖人御入山の翌春、細々と認められた其要點は、法華經の超出せることから、此經に値ひ難き旨を説

かれ、偶々信する者は必ず魔王の憎しみ深く多難たるべきを指摘され、それは今生の小苦であつて、正法を行する功德強盛なるが故に未來の大苦を招き越しての果報として大に悦ぶべきだと力づけられ、兄弟は法華經の文にある淨藏、淨眼の二子のやうに又藥王、藥上の二人のやうに、やがては慈父も正信に歸伏さるべく忍難の中に二人は扶け合ふべく、それが眞の親孝行である、兄弟は不和であつてはならぬ世間の法にも親が謀反などすれば隨はないのが孝養であるからと懇説されてゐる。又二人の女房達へも女人は柔よく剛を制すで、物に隨つて物を隨へる身である、夫婦は唯肉體ばかりでなく精神的に又世世生生に影と身と、華と果と、根と葉の如きものであるから、進退は一に夫と俱にすべきである、寧ろ婦人の力で正しい信仰に夫をも諫め導くべきであらうと激勵されてゐる。

一度は勘當までされた宗仲も、漸く機縁熟して弘安元年 孝子の念願は通じて、遂に飄然として康光は心から南無妙法蓮華經と唱へるやうになり、平和の春が一家を包んだ。

日蓮聖人 弘安五年の初秋、釋尊の昔になぞらひ給ひ、身延の澤から良に當るこの池上右衛門大夫宗仲の館に入られて、不滅の滅を現ぜられた。その前に、長榮山本門寺は大聖人に依て開堂供養の儀典が營まれたのであつた。今の本門寺の境内は法華經の文字丈け即ち六萬九千三百八十四坪の數となつてゐる。

弘安六年九月十三日、七十一歳を以て宗仲は逝かれた、法號は 朗賢院日宗居士、實に簡單至極のやうに見え深き教訓が、こゝにも含まれて居るやうに直感するではありませんか。

夫れより約三百三十餘年 宗仲公より第二十世の幸種に至つて郷士となり、廿一世幸廣の時代寛永元年に、今の大師河原を開鑿し、池上新田と稱して移住された。

廿四代幸豊は産業を好んで早くから砂糖製法に着眼し種々苦心研究の結果遂に成功し、後この製造法を關東十二ヶ國、江戶市中に傳授方を仰付けられ、苗字帯刀御免となられたさうである、猶又甘蔗の栽培の外、養魚、果樹、製油、製紙等の業を指導され

三九

た。

現代の幸健氏は第三十代に當り、醫學士として警視廳に奉職されて居る。濃厚篤學の好紳士である。

嗣て日蓮聖人時代の篤信家を見るに、其子孫連綿として今尚ほ世上に名聲高きは、實にこの池上家と、葦山の江川家あるのみ、嗟。

幸健氏は大聖人の門下が、この非常時に際しても何等これといふ國家社會に對する御奉公を致して居らぬことは慚愧の至りである、穩かではあるが聊か悲憤の語氣を漏らされた。其祖先を憶ひ、聖業を懐ふ時に一段と強い靈感を催されたであらうと推察し、暫らく緘黙を守り、やがて今後の私共の運動に對して御清援を請ひつゝ辭去した。

玄關迄見送られた氏は、身輕に「それが傘松です」と廣い庭園の一劃中に珍重されつゝある、大聖人御手植なりと稱する松を案内せられた。高さ約十尺位で而かも其周圍百數十尺、全く傘を擴げた姿で清々とした綠葉活氣旺盛し、何となく敬虔の念を催す巨松である。この老松を徹して私は大聖人に接した心地がして、遂かに立ち去り難い思であつた。恐らく

これは私だけではあるまい歎。  
南無妙法蓮華經。

新加盟者

東京市神田區三崎町三ノ一五 早川重徳殿

(家喜金吾氏御紹介)

同 小石川區小日向水道町一〇六 久保田實殿

同 芝區南濱町九 和田雪雄殿

(磯部氏御紹介)

同 豊島區雜司ヶ谷町一〇八 加藤善一郎殿

(種波芳松氏御紹介)

質疑應答

大阪の

小池君に答ふ

梶木顯正

(問) 我日本ノ皇室ト大曼荼羅トノ關係ハ如何 (御本尊ト諸天善神ト皇室トハ如何ナル關係ニアルモノト吾等國民ハ考フベキヤ)

(答) 日蓮宗の信仰の立場から、我が御皇室と御本尊の關係を述べるに當つては、先づ日蓮宗の本尊と云ふものをハッキリ正しく認識して置かねばなりません。其處で日蓮宗の御本尊に對する尤も正しい認識は法華經の壽量品に説かれたる

然ルニ善男子我レ實ニ成佛シテヨリ 已來無量無邊百千萬億那由佗劫ナリ云云

の文及び

若有ナ衆生ニ來ニ至スルニハ我レ所ニ我レ以テ佛眼ヲ觀ジテ其

信等ノ諸根ノ利鈍ヲ隨テ所ニ應キ度ニ處處ニ自ラ説キ名字ノ不同年紀ノ大小亦復現シテ言ニ當ニ入ル涅槃ニ又以テ種種ノ方便ヲ説テ微妙ノ法ヲ能ク令テ衆生發キ歡喜ノ心ト云云

の如來の教詔に依て開述顯本し給へる塵點大悲の久遠本佛教主釋迦如來が、御本尊の中心主體なることを次の日蓮大聖人の御誠諭と思ひ合せてハッキリ決定して置かねばなりません。日蓮聖人は壽量品得意抄に

此壽量品の佛の天月しばらく、影を大小の器に浮べ給ふを、諸宗の學者等近くは自宗にまどひ、遠くは法華經の壽量品を知らず、水中の月に實の月の思ひをなして或は入つて取らんと思ひ或は繩をつけてつなぎ止めんとす。云云

と仰せられてゐます。此の思想信仰(佛陀觀)が即ち日蓮主義の尤も勝れて居る所で、今日世界の宗教學上に與へんとする我が日蓮主義の信仰思想はこの

統一神であり、この統一神はキリスト教の獨一眞神と叫んで居るゴツドの上に在す神で、この壽量品の統一本佛を認めてこそ始めて世界の宗教界は夜が明けるのであり、學としての宗教學は完成されたのであります、御覽なさい上智大學、曉星中學それに今度の大垣市小學生の問題を、皆あれはキリスト教の神に對する觀念が偏狹であり間違つて居るからであります。彼等の信仰が我が日蓮主義の佛陀觀に向上しない限り我が健全なる國民思想からは容れられないので、キリスト教徒の思想信仰が非國民的なりと云はれるのは此點であります。日蓮聖人は亦申されます。

法華經に云く、我、滅度ノ後末法ノ中ニ於テ大明神ト現テ衆生ヲ利益スと申す文の心は、我れ滅度後の末法の中に於て大明神と顯れて衆生を利益すべしと申文也。されば末法と申は當時を申也。今時の垂迹和光(垂迹和光とは本佛が衆生の爲めに應じて)は是れ皆本地

かならず、大地動けば大海さわがし、教主釋尊を動かす奉ればゆるがぬ草木や有るべき、さわがぬ水やあるべき云云

と、壽量品の心を御會解き遊ばされ、法華經の教理に基いて統一の久遠の本佛を汎神哲學の上に御建立になりました、これは世界の宗教の中に於て獨り我が法華經の持つ權威であります。(故に一應曼荼羅とは示した久遠の統一本佛の建立される土臺地勢である事を知つて居らねばなりませぬ、この委しいことは統一誌上の子の「眞語抄講話」を見て頂)以上の法華經なり日蓮聖人の御教誡なり因つて私共日蓮主義者は我が日本の神及皇室天皇は絶対久遠本佛の宇宙的靈徳を國家的に體現された君王と仰ぎ信じて居るのであります。大略ながら貴問の中心點はお答へ出来たと思ひます。

今一應答を要するならば、法華經壽量品に開顯建立されたる絶対久遠の統一の一大本佛釋迦如來は世界の一切の諸神諸佛の根本神に在すので、日蓮聖人は「十法界事」の中に「未ダ久遠ヲ知ラザルヲ以

と垂迹法門の中に仰せらるゝのみならず、更に日眼(本地とは久遠とか根本)釋迦如來の化身也、此旨委しく意得可き也云云

法華經壽量品に云く、或は己身を説き或は佗身を説く等云云、東方の善徳佛、中央の大日如來、十方の諸佛、過去の七佛、三世の諸佛、上行菩薩等、文殊師利舍利弗等、大梵天王第六天の魔王、釋提桓因王、日天月天明星天、北斗七星二十八宿、五星七星八萬四千の無量の諸星、阿脩羅王、天神地神、山神海神宅神里神、一切世間の國主(天皇國主)とある人、何れか教主釋尊ならざる。(久遠本主釋迦如來)天照大神八幡大菩薩も其の本地は教主釋尊也、例せば釋尊は天の一月、諸佛菩薩等は萬水に浮べる影也、釋尊一體を造立する人は十方世界の諸佛を造り奉る人也。譬へば頭を振れば髪もゆらく、心働けば身動く、大風吹けば草木靜

テ惑者ノ本ト爲ス」と誡められてゐます。此處に注意を要することは、天照大神を始めとして、日本の八百萬の諸天善神及び御代々の天皇等は、國家を御經營なさる神であり國を護り給ふ所謂護國の神で在す、故に自ら宗教上に云ふ所の神様とは違ふのです、然るに今言ふ所の法華經の神様(宗教學上では神といふ字も同意義に用ひてゐますから今)即ち久遠の本佛は純然たる宗教上に現はれた、人類の凡てが信じなければならぬ宇宙法界の絶対者を指すのです、ですから日蓮聖人も上に仰せ給ふやうに我が天照大神もその他八百萬の神々も天皇陛下も皆此の全宇宙を支配し救済し給ふ統一の久遠本佛釋迦如來の御手であり御心の現はれであると説き教へ給ふのであります之れを専門的の言葉で言へば「本地垂迹の法門」といふのです、この本佛は「絶対」といふ文字でも示して居るが如く、始め無き始めより終り無き終りに至るまで嚴として全宇宙を大慈悲で包んで、一切衆

生を救はんとして心を碎き身を勞して御座るので、それを示されたのが壽量品の毎「自作」是「念」以「何」令「衆生」得「入」無上道「速」成就「佛身」の御教諭であります。之れが我日蓮主義の佛陀觀であり宇宙觀です。拙作ですがこの信仰を歌に詠じたのがありますからお目にかけてませう。

### 題「御父」

(一) 宇宙のすべてを照し見て

救ひの網を與へんと

久遠の御父釋迦牟尼が

我等の上に呼び給ふ

(二) 高くかざせし光明を

集ひて仰げ兄弟よ

久遠の佛陀常住に

恵の慈悲をわかつべし

(三) 幸を求めてゆく人の

人類が宗教上佛敎即ち法華經に統一された時で、同時に宗教學の完成された時と成る譯けです。法華經の本事品の中に

我々滅度後ニ後五百歲中ニ廣宣流布シテ於テ閻浮

提ニ(閻浮提とは全世界)無レ令(ムレト)斷絶シテ惡魔魔民諸

天龍夜叉鳩槃荼等ニ得テ其便ヲ云云

と説かれ亦勸發品には

於テ如來ノ滅後ニ閻浮提ノ内ニ廣ク令テ流布シ使

不ラ斷絶セ云云

等と示されて居りますから、それは全く時間の問題とは云ふものゝ、志ある者が奮起してその時を作るべく精進せねばなりません。現在の如き有様で推せば流布どころでなく法滅に向ひませう、お互に法華經の純粹宗教を高調力説、最善のベストを盡さねばなりません。

次に「法華經ト日本國トノ因縁關係」に就ては、瑜伽論と云ふ彌勒菩薩の作られた書物に「此の妙法蓮華經は印度から指て丑寅の方の國に縁がある」

東に西にはてしなし  
我等の父は呼び給ふ  
御聲のもとに還れかし

我れ〱お互ひに知る世界の上に信する世界の有ることを深く〱味讀信解せねばなりません。以上の信解をよく〱御會得下さるならば、貴問の「久遠ノ御本尊ト吾等國民ノ尊敬シ奉ル我天皇陛下トハ如何ナル關係ニアリト吾等國民ハ心得ベキヤ」の問題は御了解のゆくことと思ひます。

【問】 佛敎テ世界的ニ流布スル事、即チ法華經ヲ地球ノ全

世界ニ流布シ佛敎ヲ以テ世界ノ宗教ヲ統一スル事、換

言スレバ我日本ガ全世界ヲ統一スルト言フ事ハ時間ノ

問題ナリト信ズ。如何

法華經ト我日本國トハ如何ナル因縁ニアルモノニ候哉

(答) 佛敎を以て世界を統一し法華經を以て世界の宗教を統一するとは、我が法華經の闡顯建立する所の絶對久遠の統一本佛を世界の全人類が信じ仰いだ時をいふので、之れを仰がしめた時が即ち世界の

と云ふ事が記されてあります。其丑寅の方角にあたる國といふのを段々調べてくれば、それは日本國でありました。

又羅什三藏が法華經を師匠の須利耶蘇摩三藏から

印度で受取られた時に、彼が頭を摩で、「此經典は

縁、東北にあり、汝謹んで傳弘せよ」と云つたの

です。それは法華經が印度から指して東北の方の國

即ち日本に縁があつて、其處から弘まると云ふ意味

で、日蓮聖人は此等の文を拜見して、「兩眼涙滿の

如く、歡び一身に還し」と仰せられて居ります。

又比叡山の慧心僧都なども「日本の國はすべて法

華經に縁の有る國である」と云ふことを言はれて居

ります。

不思議な事に日本では佛法が渡來した最初、聖徳太子が初めて佛法を興隆せられた時にも、一切經の中から法華經を取り出して、此の經が一番宜しいと云つて、法華經は鎮護國家の妙典、即ち此日本の國

を譲り、日本の國に適した一番大切なお経であると  
いふことを、聖徳太子は申されて居ります。

其の傳教大師が出來られて、桓武天皇の御歸依に依  
つて比叡山が出來た時、其のお祝に京都の都を造ら  
れ、奈良の六宗を止めて一つの法華宗に纏めたその  
お祝に奈良の都から京都へ遷つて、平安の都と云ふ  
ものが出來たのです。其時にも法華經を京都の市街  
の下に、石に寫して埋められたといふことで、又傳  
教大師の着て居られた袈裟に準じて、京都の町を一  
條から九條まで造られたのです。

實に法華經と日本國は因縁關係が深いと云はねば  
なりません。日蓮聖人がお出ましになる前から、我  
朝廷で御法事を遊ばす時は、法華經より外はお用ひ  
なかつたのです。法華八講と云つて四日間午前と午  
後との二度宛の法事を續けて八回の法要をせられま  
す。又朝廷で追善の爲めにお書きなさるお經も法華  
經が主であります。畏れ多くも 明治大帝が御崩御

になつた時に、昭憲皇太后が書寫遊ばしたのも法華  
經であり、皇太后陛下の御崩御の時も法華經であり  
大正天皇の御時にも法華經であつたと申すことであり  
ます。

我國で昔から寫經が盛んであつた時分に偉人の書  
かれたのは大概法華經であります。菅原道真公でも  
楠正成公でも等々現存されて居ります。それ程日  
本に於ては法華經の縁があります。其法華經の精神  
を一層徹底して世に主張し、命懸けで弘められたの  
が日蓮聖人であります。

何故そんな法華經々々々と、日本では大事にさ  
るゝかといふことを一言申せば、法華經の精神と、  
我日本の國體とが不思議にも合致して居るからであ  
ります。これは法華經を御覽になりますれば、自  
ら首肯さるゝと思はれます。  
ではこれでお答へは打ち切ります。

# 教 報

## 本部 團 報

毎日曝屋外講演 本部から二停留場南の江  
戸川公園前に於て、左記の通り布教にいそし  
んだ、幸にも毎回進行人、或は納涼の土女  
百餘名は、熱心に傾聴し隨喜されたことは有  
難いことである。

八月二十七日 第四日曜日

菩薩行 禪部 滿事氏  
日本國と日蓮聖人 河合 彰明氏  
閉會の辭 總引 弘氏  
奉仕 長岡 義貫氏

九月三日 第一日曜日

十歩の教訓 河合 彰明氏  
教育と宗教 小西 日喜氏  
奉仕 久保 田實氏  
同日 第二日曜日  
日蓮聖人 禪部 滿事氏  
閉會の辭 村田 進雄氏  
奉仕 長岡 義貫氏  
久保田 實氏  
和賀 謙介氏

屋內法要並びに布教九月十七日第三日曜日  
彌々初秋の佳節に向つたので、本日から從  
前通り、屋內で法要と講演を營むことにした  
開目抄の精神と現代 河合 彰明氏  
祖訓を拜して 梶木 顯正師

大震災十周年 記念すべきかの九月一日  
に於て、私共は其の直接たる間接たるを問  
はず、この災厄に遭難せる多數同胞の不幸を  
ば、何として無爲に過されよう、血と涙とを  
以て追悼會を營むと共に、之を活用すべく法  
要後に講演會を開いた。

當日午後七時、講堂に設けられた賽壇前に  
管長兼川大僧正導師の下に小西、星野、梶木  
本郷等の諸師並に釋眞誓師も隨喜參列され、  
講堂熱誠なる讀經唱題燒香等常例の通り營ま  
れた。八時より講演に移り、禪部滿事氏開會  
の挨拶として二十分許り述べ、次に河合彰明  
氏及び小西日喜師に依つて甚深なる追悼法話  
が十時過ぎも續けられた。

因に當夜參詣者一同へ「勸行作法」並に「修  
法勸行の心得」各一部宛供養した。  
地方布教 九月三日栃木縣下梅園に於ける  
舊盆會を善用すべく、禪部滿事氏は出張し、

## 横 濱 教 誌

同九日福島支部の研究座談會並びに福島高商  
日蓮聖人讚仰會法華經講義に例月の如く河合  
彰明氏は出講した。

八月四日 午後七時半 中區壽町長久保氏  
方にて集會。法華經の眞價。禪部先生。

同九日 夜 磯子區高橋氏方にて集會。法  
華經。禪部先生。防空演習のために燈火の管制  
をされ、薄暗い燭光の下に行はれた印象深い  
集りであつた。

同十二日 夜 神奈川區鶴屋町京田氏方に  
て集會。法華經の聖人。禪部先生。

同十四日 夜 中區白砂町長谷川氏方に  
て集會。力ある信仰。禪部先生。

同二十三日 夜 神奈川區榮町石毛氏方に  
て臨時集會。正信と受難。禪部先生。十五日  
朝高島通りの石毛氏宅が隣家からの貫ひ火で  
文字通り全焼した。火の早かつたのと、人手  
不足であつたのとで、何一物取り出し得なかつ  
た。併しその危急の中にあつて、御本尊だ  
けはよく安全に守られたのである。急に處し  
ての石毛氏の此の決定信には、會員一同、唯

合掌讃嘆のあるばかりである。あと仕末の一ト先づすんだ此の夜、榮町の立退先で東京より藤部先生の御來賓を乞ひ、一同寄り集ふて御本尊の無事であつたこと、全焼とは云へ、石毛氏の身邊に於てすり傷一ツなかつたこと等を自他共に歎び合ひ、御寶前に唱題讃經したのである。

同二十四日 夜 磯子區大内氏方にて集會

『法華經の功德』藤部先生。

岩上清三郎氏は、その郷里に道を傳ふ可く月末、栃木へ向はれた。

二本松教信

八月二日 夜 於蓮華寺題目講修行。

同十四日 午後二時二十一分二本松縣通過にて二師團長の宮殿下着任遊さる、因つて奉迎す。

同十五日 二本松佛敎不樂會托鉢修行。

同二十二日 午前五時五十三分二本松縣通過にて駭死者遺骨一基郷里に歸る、因つて出迎ひ讃經す。

同二十五日 蓮華寺本堂建築に付き檀信徒

参列の上地無祭を舉行す。

同二十六日 午前十一時五十七分二本松縣通過にて師團長宮殿下管下御巡視の爲通過さる、因つて奉送す。

追記 蓮華寺本堂建築費算金五千七百五拾圓也を以て約四十五坪餘の工事に着手せるに付廣く有志の御清援を仰ぎ來る。

寄附維持金團費誌料領收

(自八月二十一日至九月二十日)

一 金貳圓	圓也	大阪	徳永	信隆	一 金貳圓四拾錢也	名古屋	相澤	とき殿
一 金貳圓貳拾錢也	圓也	千葉縣	小高	了海殿	一 金貳圓貳拾錢也	横濱	長久保	太徳殿
一 金貳圓	圓也	山形縣	長澤	辨太殿	一 金四圓	東京	秋澤	吉藏殿
一 金貳圓四拾錢也	圓也	大連	重松	弘通殿	一 金貳圓貳拾錢也	横濱	高部	静子殿
一 金壹圓貳拾錢也	圓也	東京	本郷	次郎殿	一 金壹圓貳拾錢也	東京	池澤	春明殿
一 金八圓五拾錢也	圓也	北海道	木原	文靜殿	一 金貳圓貳拾錢也	山形縣	宮田	日見殿
一 金貳圓貳拾錢也	圓也	東京	總引	弘殿	一 金壹圓貳拾錢也	山形縣	川島	義本殿
一 金四圓	圓也	同	沼部	彌太郎殿	一 金貳圓貳拾錢也	新島縣	川島	ギン殿
一 金貳圓五拾錢也	圓也	同	小西	日喜殿	一 金貳圓貳拾錢也	愛知縣	藤田	清太郎殿
一 金四圓	圓也	同	濱中	治三郎殿	一 金貳圓貳拾錢也	東京	笠間	信隆殿
一 金壹圓	圓也	同	宇野	博順殿	一 金貳圓貳拾錢也	同	山田	英二殿
一 金五圓	圓也	横濱	小峰	豊子殿	一 金貳圓五拾錢也	同	田中	峰太郎殿
一 金貳圓貳拾錢也	圓也	東京	加藤	善一郎殿	一 金貳圓貳拾錢也	同	中村	光三郎殿
一 金貳拾五圓也	圓也	同	横山	正三殿	一 金貳圓貳拾錢也	同	鈴木	祐五郎殿
一 金六拾錢也	圓也	同	雨森	春吉殿	一 金貳圓貳拾錢也	同	日下部	二葉殿
一 金貳圓貳拾錢也	圓也	同	栗原	敬三殿	一 金貳圓貳拾錢也	同	長澤	信一殿
一 金貳圓貳拾錢也	圓也	同	細野	辰雄殿	一 金貳圓五拾錢也	同	柴田	武治殿
一 金參圓	圓也	京都			一 金貳圓五拾錢也	同	井上	道太郎殿

右難有入帳仕候也

財團法人統一團會計

清水龍山

守屋貫教 鈴木一成

中谷良英 榎原久遠

共編

内容見本呈上

新修 略註 蓮聖人遺文集

再版 改訂

科段 別註 御遺文百廿余編(脚註入)

体裁 装幀

御義口傳 御講聞書 妙行要文集 一日一訓 聖語字解

發行所

久

遠

閣

巻頭挿入クリムアート寫眞版七葉  
四六版 縦六寸二分 横三寸五分  
紙數 千百十四頁  
特製 總皮 三方金  
並製 總クロス 天金  
函入最上美本  
定價 特製 三圓八十錢  
並製 二圓八十錢  
送料 廿一錢

東京市日本橋區江戸橋二ノ六(明正ビル)

電話日本橋 30三二七番  
番町 1座東京 七二八〇六番

謹告

各位の渴望されて居りました故本多日生上人御撰述に依る本經祖書要文全部が掲載された勤行方軌としての法華經要品がいよいよ清朝新活字を用ゐて見事に出来致しました。又日生上人が先年入念に弘通用として謹書し置かれし大曼荼羅御本尊は授與願出の方に感得者心得を相添へ、便宜お願ひ致します。此御本尊と要品があれば、子々孫々迄も修行上には百パーセント疑ありません。殊に要品は日蓮主義心髓たる本經祖書要文全部ありますから、自家用には勿論、布教用にも、施本用にも、洵に適當と存じます。

故本多大僧正撰  
法華經要品 並本經祖書 壹部  
要文集 改正定價 金五拾錢  
送料共

御本尊 大特別用  
中普通小型佛壇用  
小懐中用

授與御希望の方は願書提出の事書式用紙は御報次第差上ります。

勤行作法 壹部  
金拾錢  
送料共

百部以上御注文の時  
は御望に依り貴名額  
込み致します。

一册 金貳拾錢 送料五厘  
半々年 金壹圓貳拾錢 送料共  
一ヶ年 金貳圓貳拾錢

▲御申込ハ總テ前金ノ事  
▲前金相切候節ハ包紙ニ其旨表示可  
▲御精居ノ場合ハ必ず新膏共直ニ御  
通知ノ事

昭和八年九月廿四日印刷納本  
昭和八年十月一日發行  
(第四百六十三號)

東京市小石川區音羽町六ノ一七  
編輯兼 磧部滿事  
發行人 磧部滿事  
印刷人 鈴木日雄  
東京市品川區南品川二ノ一八一  
印刷所 都印刷所  
電話葛輪六〇二四番

發行所 財團法人統一團

電話牛込五三三六番  
電話東京九四二〇番

目次

聖訓摘要	日生上人
日蓮教學講座(第二回)	河合陟明
日什上人諷誦章講話(其五)	梶木顯正
旅記	碓部滿事
非常時の國民精神作興	
本部團報並に各地教信	
寄附團費誌料領收	

第三十八年十一月號

